

# 特殊神事

指定区分 福井県指定無形民俗文化財

文化財名 オシツサマのお渡り「獅子渡御神事」

指定年月日 平成三十一年三月二十三日

所在地 本堂町

管理人 本堂町内会

昭和三十年代迄は九月十三日の秋季例祭にお獅子渡御神事が行われたが、現在は秋季例祭とお獅子渡御神事を十月・体育の日(祝日)の前日に行っている。由緒社伝によると、その昔本堂と言う村は平和であり村の人々は楽しく暮らし春秋の祭礼には豊作を祈願して夜の明けるまで踊りつづけたという。九月十三日の祭礼が近づくと小さな子供のいる家の屋根へ一本の無気味な白羽の矢が立てられた。その家の可愛い男の子を神様への生贄と信じ、笹の生い茂る無気味な死児の橋へと送る習わしが続くようになった。白羽の矢の当たった家の子供を生贄に出さないと、その年は大凶作とな



養に立ち寄り、お獅子は各家で約二十分安置される。七郷巡行の構成は、祭装束の守護役四名の他、法被婆の氏子中四名と子供連中数名が随行する。子供連中が打つ太鼓の音を聞いた村人は辻道に出てお獅子を迎え、供養米を献上する。お獅子は夕方帰還し、宵宮祭まで宵の宮に安置される。

## 獅子渡御

宵宮祭(宵の宮から松手の宮へ)

夜八時区長、氏子総代、青年会と共に守護役を先導に宵の宮へお獅子をお迎えに行き、参拝を済ませ青年会の持つ提灯の明りで宮を出るお獅子の姿は誠に勇壮である。渡御は天狗神(猿田彦命)が先導し区長、氏子総代が進む。続いてササ竹をお獅子(天鈿女命)の頭上に被せ、竹に結びつけた綱を手に子供連中(男の子)が人身御供の送り唄「サイヨリミヨリ、イテデコデント



死児橋の遺跡

えた所の生贄に出す箱の中で待ち伏せ、一太刀を浴びせた。翌朝村人たちと共に点々と続く血の跡を追い、高雄山の奥深い洞穴の中にいる怪物を退治した。それから村は平和が戻り村人達は安心して暮らせるようになった。村人たちは旅の侍のおかげとその徳を讃え、里に戻った平安を喜び心ゆくまで祭りを楽しんだと伝えられている。侍は唯一言、わしは猿田彦の子孫で国内の化物を退治するために旅をしている者だと言つて旅に出た。それから侍の遠い祖先である猿田彦命(天狗神)天鈿女命(獅子神)夫婦神をお祭りにして永くその徳を伝え今なお町内上げて二神を祀る渡御神事が

り平和な村は悲しみのどん底に落ちた。ある年通りがかりの侍が、これは怪物の仕業と言い、死児の橋を越

現れた怪物に

齊行されている。

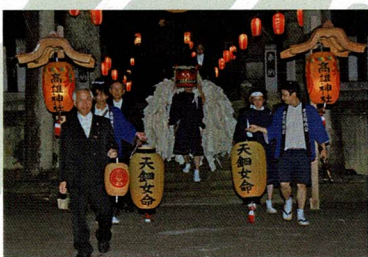
## 神衣切り



祭事の守護役は、宮本・堂下・円光・堂下の四家で昔から変わらず現在に引き継がれている。一軒毎に年交代で神衣切りのお宿となる。本日祭の前々日(金曜日)夜八時子供会連中によるふれ太鼓で始まり区長、氏子総代の立合、一般の方々の見守る中猿田彦命、天鈿女命のご神衣を作る行事である。守護役は身を清め越前和紙を大きな紙切り包丁で短冊状に切り、麻の繊維で作った縄に綴じ込み一連のご神衣を作る。

## 獅子七郷巡行

七郷とは本堂・更毛・羽坂・細坂・安田・北堀・恐神で、その昔人身御供を出した十二軒の家を御供



イコマイカ、死児の橋をコシタナラ、イカイチチオニギラシテ、ナンバミソイヤナラゴツトミソ」と唄いながら綱を引く。最後尾に大太鼓が続く。青年会や村人の打ち鳴らす太鼓の音に合わせ一歩、又一歩と進む。死児の橋へ近づくと太鼓を打つ調子も早打ちへと変わり、宵宮祭は最高潮に達する。ササ竹が外され子供連中が散らばると、猿田彦命が先頭に、天鈿女命と共に宙に大きく紙をなびかせて舞い、やがて松手の宮へ疾走する。青年会の担ぐ大太鼓も轟しながらか跡に続く。二神は松手の宮に安置され多くの参拝者が絶えません。閉扉午後十一時。

## オンモク

松手の宮に入ると頭上の天井部分にこの行事のための床が設けられている。力自慢の若者がここに登って、供養米を蒸したオンモクを握って下の参拝者に手を差し出す。



## 獅子還御

本日祭(松手の宮から宵の宮へ)

松手の宮で一泊された二神は午後一時三十分お祓い神事後、同二時頃に宵の宮へお戻りになる。前夜の宵宮祭と同様に青年会や村人が打ち鳴らす太鼓の音に合わせて一歩、一歩と進み本社参道入口に近付くにつれ太鼓の音も早打ちになる。やがて参道入口の大きな小田原提灯の下から天狗神と御獅子の二神が紙を宙になびかせて舞い、宵の宮に向けて疾走する。青年が担ぐ大太鼓もこれに続き、大鳥居をくぐって境内に入り宵の宮へ駆け込む。二神を安置した後、守護役からオンモクを手渡しで戴ける。本社拜殿、本殿では秋季例祭の神事が執り行われる。午後十時二十分閉扉